Science for a **better life**

Bayer

芝草通信

Vol. 27

“2019年の夏を振り返る”

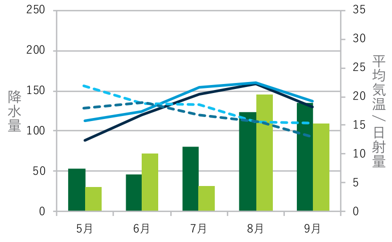
気象データと
病害診断結果より

2019年夏の気象データ

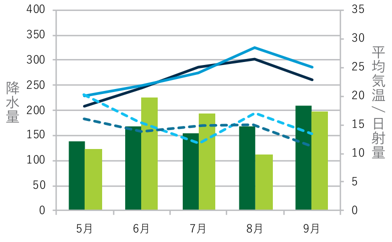
平年降水量　2019年降水量　平年平均気温　2019年平均気温　平年日射量　2019年日射量

- 全国的に9月の気温、日射量ともに平年より高く、残暑が厳しかったことが伺える
- 関西地方及び九州地方では台風の影響もあり8月の降水量が非常に多かった
- 関東以南では7月の日射量が低く、梅雨明けが遅れたことを示している
- 九州地方では8月の降水量が多く、日射量も少なかったことから芝生管理しづらい夏となった
- 北海道では7月の降水量が極端に少なく、乾燥害に苦労したと思われる

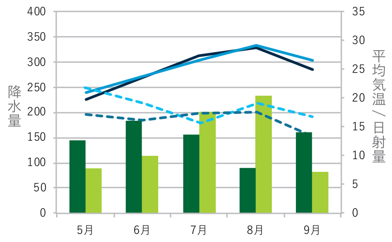
北海道（札幌）



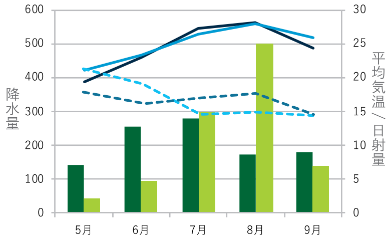
関東（東京）



関西（大阪）



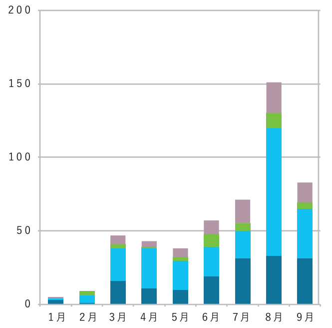
九州（福岡）



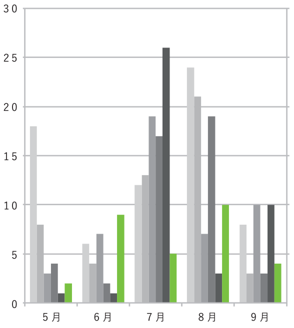
2019年の病害診断結果

2019　ピシウム・赤焼病　細菌病　炭疽病　その他
2014　2015　2016　2017　2018
西 西日本診断数
東 東日本診断数

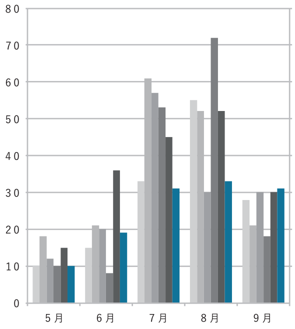
2019年1月～9月の月別病害診断数



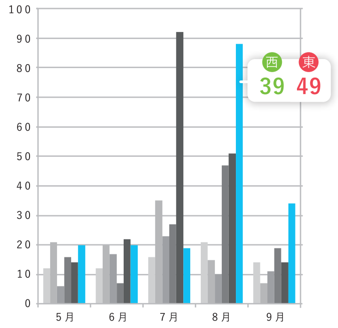
ピシウム・赤焼病



炭疽病



細菌病



2019年の病害診断結果から見えること

- 病害診断の依頼数自体が、2017年や2018年に比べて少なく、病害の発生しにくい夏だったことが伺える（右記バックナンバー参照）
- 7・8月でのピシウム病の多発生は見られなかった
- 炭疽病の発生も夏を通して比較的少なかったものの、細菌病は梅雨明け後の8月に全国で猛威を振るった

こちらのQRコードから芝草通信バックナンバーをご覧いただけます

2017年資料
芝草通信vol.7

2018年資料
芝草通信vol.18

Bayer × LINE 公式アカウント

タイムリーな芝草管理情報を配信中！

1 LINEの「ホーム」から右上のアイコン をタップ。
2 右記のQRコードを読み取って、友だち追加！

2019年の夏の特徴

1 台風による大雨など、自然災害が多発した年であった

2 猛暑日や長雨がそれほど多くなく、殺菌剤を散布するべきタイミングで散布できたコースが多かったためか、病害の発生は比較的少なかった

3 細菌病に関しては有効な薬剤が少なく、体系的な防除方法も確立されていないことから引き続き多くのコースで発生しており、依然として大きな問題になっている

4 お盆以降の残暑が厳しく、なかなか温度が下がらなかったことから、8月下旬〜9月上旬にコアリングを実施したコースでは、グリーンにダメージが発生したコースが見られた

8月に細菌病によってダメージを受けたベントグリーン

夏の気象は予測できない

以前にも増して、夏の気象を予測できなくなっています。今年は比較的ベントグリーンを管理しやすい夏でしたが、猛暑、長雨、日照不足、乾燥など、来年以降どのような夏になるのか予測がつきません。
バイエルがおすすめしているストレスガード製剤のプログラム予防散布は、どのような夏に対しても事前にしっかりと準備しておくことで、炭疽病やピシウム病などの病害によってグリーンが大きなダメージを負うことを防ぎます。

ストレスガード製剤プログラム予防散布例

★ ストレスガード製剤

散布時期	4月	5月			6月			7月		
	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
薬剤名	★シグネチャーWDG(1)		★ミラージュ(0.5)	★シグネチャーWDG(1)	プロテクメートWDG(1)	★インターフェース(1)	★シグネチャーWDG(1)	★シグネチャーWDG(1)	★ミラージュフロアブル(0.5)	★シグネチャーWDG(1)
	TPN剤		プロテクメートWDG(1)	TPN剤	TPN剤		TPN剤	TPN剤		
	ピシウム剤A(カーバメート)							ピシウム剤B(イソキサゾール)		ピシウム剤C(QiI)

散布時期	8月			9月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
薬剤名	★インターフェース(1)	★シグネチャーWDG(1)	プロテクメートWDG(1)	★シグネチャーWDG(1)	★シグネチャーWDG(1)	プロテクメートWDG(1)
				TPN剤	TPN剤	TPN剤
	ピシウム剤D(テトラゾリルオキシム)	ピシウム剤E(フェニルアミド)	ピシウム剤C(QiI)	ピシウム剤A(カーバメート)		

※( )内の数字は薬量を表し、単位はml/㎡です。
※ストレスガード製剤及びプロテクメート WDGの散布水量は100ml/㎡を想定しています。
※シグネチャー WDGとプロテクメート WDGの混用はできません。
※複数の薬剤をタンクミックスする場合、投入の順番は①展着剤→②液剤→③乳剤→④フロアブル剤→⑤水和剤です。
※初めてタンクミックスを行う組み合わせの場合、事前にバケツ等で混用試験を行うことをおすすめします。
※散布例はピシウム病の発生圧が高いケースを想定しています。ピシウム剤については、地域・発生圧・気象条件等により適宜散布回数や時期を調節してください。

来年は、春からのストレスガード製剤のプログラム予防散布でワンランク上のグリーンを目指してみてはいかがでしょうか。

バイエル クロップサイエンス株式会社　エンバイロサイエンス事業部 | 〒100-8262 東京都千代田区丸の内 1-6-5　www.environmentalscience.bayer.jp